

関連学会印象記

アメリカ麻酔科学会年次集会(ASA2008)に参加して

徳田 賢太郎*

2008年10月18日から22日の日程で、米国フロリダ州オーランドにおいて American Society of Anesthesiologists 2008 Annual Meeting が開催された。約1,800件の一般演題が採択されたそうであるが、昨年に引き続き今年も私の応募した演題が通ったため、夏休みをかねて家族を連れて参加することができた。昨年は西海岸のサンフランシスコであったため飛行時間も短くてすんだが、今年はフロリダということで飛行機の乗り継ぎ回数も多く、自宅を出発して丸一日近く経過してようやく目的地オーランドのホテルへとたどり着いた。到着した日が学会初日ではあったが、もう夕方であったことと疲労困憊していたこともあり、その日は早々に休みをとった。

気を取り直して翌日学会2日目は、朝早くから起きてシャトルバスで学会場へと向かった。この日は妻も学会参加するため、息子二人は学会の託児プログラムに預けられるよう予約をしていた。学会会場横のホテルの託児場所に子供を連れていったが、私が予想していたよりも少なく、その日は10人ほどの応募しかなかったようであった。その割には学会場で子ども連れの人をよく見かけたし、機器展示場の入り口にも子どもは親の責任できちんとみておくようにという注意書きがされていた。我が家の子どもたちは英語が全くできないが、それでもなれたスタッフが子どもを飽きさせないプログラムを組んで預かってくれており、子どもたちは満足した様であった。

学会場の Orange County Convention Center は全米第2位の大きさを誇る会議場であるそうで、今回の学会ではそのうちの西棟のみが会場として使われていたが、それでも日本の学会場の感覚から

すると、とてつもない広さの会場であった。各セッション間の部屋の移動にも苦勞するような広さであったが、会場の職員らしき人の中には SEGWAY に乗って中を移動している人もいて、広さの違いを実感した。

私の参加1日目(学会2日目)の午前中には、学会前にあらかじめ連絡をとっていた、米国内で自分のラボを構えている日本人の先生とお会いすることができ、米国内での研究の状況など興味深いお話を伺うことができた。その後その先生の元に留学している日本人留学生の方と、米国内で Cardiac anesthesia の fellow として臨床留学している方と昼食を一緒にすることができ、研究生活や留学生活、そして日米の医療の違いなどについて、有意義な情報交換を行うことができた。

午後はいよいよ自分の発表である。今回の私の応募演題は、九州大学病院麻酔科における麻酔関連誤薬に関するインシデントについての15年間分のまとめに関する報告であり、Patient Safety: Practice Management—General Topics というポスターセッションに分類されていた。同じセッションを見回してみると、私の発表と同じく誤薬に関するポスターが散見され、やはり誤薬の予防ということが麻酔安全の向上と切り離せない話題であると感じた。午後2時から4時までが発表に割り当てられており、座長の先生が聴衆を引き連れて発表者それぞれのポスターの前で一人ずつプレゼンテーションを行わせた(写真1)。残念ながら日本の麻酔学会での同様のポスター発表では聴衆から質問が出ないことが少なくないが、さすがにこちらの学会では座長ばかりでなく聴衆からも盛んに発言があり、場合によっては発表者と口角泡を飛ばす白熱した論戦が繰り広げられていた。いよいよ自分の発表の番となったが、英語には全く自信がな

*九州大学病院麻酔科蘇生科

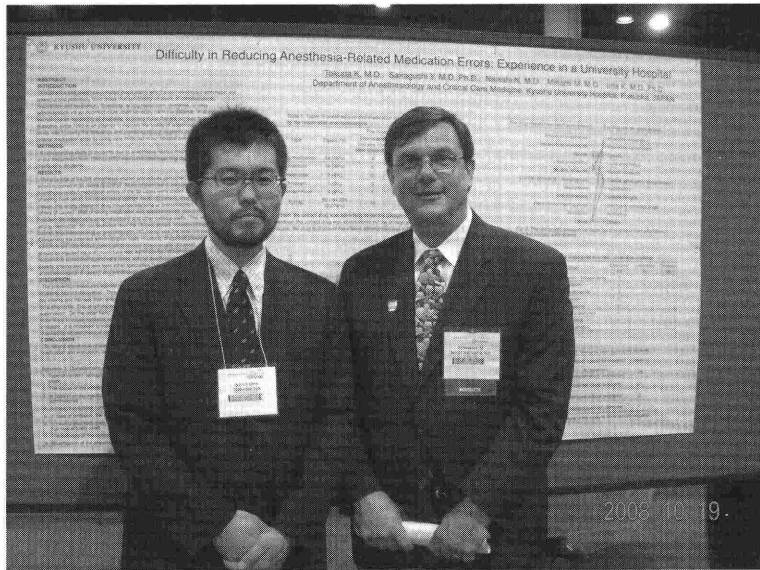


写真1 座長の Bittenbinder 先生と筆者

かったため、まずはあらかじめ読んでいた発表原稿を身振り手振りを加えながらたどたどしくも話すことができた。座長・聴衆も私のまずい英語に対して熱心に聴いてくれ、発表内容に関する質問もいただいた。発表の中での、professional anesthesiologists と anesthesiologists without national qualification anesthesiologists という区分の定義を聴かれたので、日本では2年間の麻酔科研修の後に取得できる国家資格である麻酔標榜医制度というものがある旨説明した。また外科からのローテーター麻酔医というものが当院ではあるということの説明したが、そういうものが存在するということが納得できないようであった。さらにこれは予想された質問であったが、この麻酔関連誤薬のインシデント報告は正直に全例報告されているのか、という内容の質問もなされた。全体にこの異国からの英語の不自由な参加者に対しては好意的な対応であり、最後には座長から、よく頑張りましたね、と慰めの言葉もいただき、やはり人を褒めることが上手な国民性なのだなと感じた。

参加2日目は、まずは Refresher Course を聴講することとした。もう一つ、Problem-based Learning Discussion というセッションもあり、いくつもの細かなテーマが準備されていたが、英語を駆使して文字通りの議論を行うということであったので、残念ながら怖じ気づいて今回は参加しなかった。

Refresher Course では胸部外科の麻酔に関する講演や、肺高血圧に関する講演などを選んで聴講したが、どの演者も巧みな話術で、また画像も駆使しながら講演を行っていた。入室する前には聴講者に対して講演の評価用紙が配られ、演者が直接評価されるため、聴衆を飽きさせないプレゼンテーションの技能が要求されるのだなと実感した。Refresher Course といえばこれまでは分厚い冊子で資料が配付・販売されていたが、今年からはUSBメモリーへと変更になっており、冊子は発行されなくなったとのことであった。あの大部な冊子を持ち運ばずにすむようになった反面、実際に聴講しながら資料を確認することができなくなってしまった。もっとも日本へ持ち帰ることも容易になったため、後輩へのお土産として10数個購入して帰ることとした。

その日の昼には、私の上司である外須美夫教授の米国留学時代の同僚であり、今年のASA Excellence in Research Awardを受賞されたウィスコンシン医科大学のBosnjak教授の受賞記念講演があったので聴講した。教授は20歳の時にクロアチアから移住してきたということであり、その後基礎研究の分野においても、また研究のマネジメントの面においても頭角を現わし、今やアメリカの麻酔科学会における重鎮となっているということであったが、教授の才能に感嘆するとともに、異国

出身者も努力次第でそこまで成功することができるというアメリカ社会の懐の深さを感じた。

午後は興味があった周術期吸入 NO 療法に関するパネルディスカッションを聴講した。3人の演者が心臓移植術・LVAD 装着術での NO 使用、移植手術での虚血再灌流障害に対する吸入 NO 療法、小児心臓外科手術での NO 療法の役割について講演された。その後、午後のポスターセッションで九州大学の同僚数人の発表があったためポスター会場へと向かった。

機器展示場も視察したが、広大な会場に様々な麻酔関連機材や薬剤などが展示されていた。私の興味を引いたのは、英国の会社が出品していた、エコープローベ操作に対応してリアルタイムで画像が得られる経食道心エコーのシミュレーターシステムというものであった。これまでのシミュレーターではあらかじめ登録してある画像しか表示

できなかったのに対して、このシミュレーターでは手元の微妙な操作も画像に反映されるため実際に人に対して検査するのと同じ感覚で画像を表示できるようになっていた。

盛況な学会だと個人的には思ったが、数人の意見を聞いてみるとイラク戦争の影響で麻酔科学も含めた医学への研究費が削減される傾向にあること、また米国内の不況の影響で以前に比べると企業に活気が少ないということであり、今後数年にわたって麻酔科学会は厳しい状況に立たされるのではないかということであった。

海外での学会に参加するのはこれで4回目であったが、参加する学会それぞれ刺激的であり、英語力が不足していることも実感させられるが、日本へ戻ってからまた日々の臨床にそして研究にがんばろうと前向きな気分になるのであった。